

## 「コロンブス 永遠の海」

☆☆☆

2010（平成22）年6月27日鑑

賞<テアトル梅田>

監督：マヌエル・ド・オリヴェイラ

1946～1960年

マヌエル・ルシアーノ／リカルド・トレパ

シルヴィア／レオノール・バルダック

2007年

マヌエル・ルシアーノ／マヌエル・ド・オリヴェイラ

シルヴィア／マリア・イサベル・ド・オリヴェイラ

エルミニオ／ジョルジュ・トレパ

守護天使／ロウレンサ・バルダック

マヌエルの母／レオノール・シルヴェイラ

ポルト・サント島の博物館長／ルイス・ミゲル・シントラ

2007年・ポルトガル、フランス合作映画・75分

配給／アルシネテラン

### <100歳超のポルトガルの巨匠を、はじめて発見！>

映画評論を書くようになってから、私は『カティンの森』（07年）で知ったポーランドのアンジェイ・ワイダ監督、『ウエディング・ベルを鳴らせ！』（07年）で知った旧ユーゴスラビアのエミール・クストリツァ監督たちヨーロッパの巨匠を発見したが、1908年12月11日生まれだから、今100歳を超えているポルトガル生まれのマヌエル・ド・オリヴェイラ監督を本作ではじめて発見！

彼は1931年に初作品を発表したが、1980年頃からは毎年1本ペースで新作を発表し、07年の本作以降も新作が目白押しというからビックリ。さらに驚くのは、本作ではオリヴェイラ監督自身が老後の主人公マヌエル役で、妻シルヴィア役の奥さんマリア・イサベル・ド・オリヴェイラと共に出演していること。日本では1912年4月22日生まれの新藤兼人監督が今なお脚本家兼現役監督として「怪物」的役割を果たしているが、オリヴェイラ監督の「怪物ぶり」は新藤監督以上！

もっとも、そんなポルトガル人のオリヴェイラ監督を知っている日本人は少ないはず。したがって、2010年6月25日付日経新聞夕刊「シネマ万華鏡」で映画評論家・中条省平氏が星5つをつけて絶賛しているが、本作を観てその良さを満喫できる日本人は少ないかも？

### <コロンブスはポルトガル人だった！>

私は数カ月前にはじめてタイトルを見た時、本作は帆船に乗ってはるか彼方の海原に乗り出していくコロンブスの冒険物語だと思ったが、予告編を観てそんなイメージが全然違うことがわかり失望。観るのをやめようと思っていたが、前述の「シネマ万華鏡」をはじめ各種評論で絶賛されているのを読んで、態度を改めた。本作のテーマは、コロンブスは（通説どおりのイタリア人ではなく）ポルトガル人だった！というもの。しかし、それは本作の原作本『コロンブスはポルトガル人だった』や、それを読んだオリヴェイラ監督にとっては重要なテーマかもしれないが、日本人には全然馴染みのないテーマだ。

本作は、①1946年、ポルトガルのリスボンからアメリカのニューヨークへ移住する主人公マヌエル、②青年時代をアメリカのニューヨークで過ごすマヌエル、③シルヴィアとポルトで結婚し、新婚旅行でポルトガルのクーバやベージャを訪れるマヌエル、④47年後の2007年、マサチューセッツ州パークレーのダイトン・ロック州立公園で、大航海時代の船の模型が展示されている会場を巡る年老いたマヌエルたち、そして⑤コロンブスが航海へ旅立つまで妻と息子と過ごしたポルト・サント島の家を訪れるマヌエルたちを追っていく。そしてその中で、「コロンブスはポルトガル人だった」ことの研究に一生を捧げるマヌエルの姿が描かれる。しかし、よほどそのテーマを勉強している人でなければマヌエルのそんな執念を理解するのは困難。そこらあたりのスタンスをしっかりとっておかなければ、「期待はずれ！」「こりゃ一体何の映画？」と誤解する人も出てくるのでは？

### <なるほど、これが映画づくりの神髄！>

本作は冒頭、小難しい署名のやり方やコロンブスの名前の由来（というより、その呼び方は間違っていること）がナレーションで説明されるので、多少うっとうしいと思う面もある。しかし、それ以降は映像のコントラスト、美しい海の風景そして語りかけるようなピアノの音色が特徴的。

中条省平氏がこれらを、①「抜けるような青空のリスボンから、濃霧にけむる夜のニューヨークへ。明暗のコントラストだけで背筋が震えるような映画感銘が生まれる」、②「紺碧の空。流れる雲。照り翳る陽光。灰色に閉ざし、真っ青に広がる海。点描されるそうした自然が、個々の人間の小さな時間をこえて、もっと大きな永遠の時を示唆する」と表現しているのはさすが。なるほど、これが映画づくりの神髄と感ずることができたなら、あなたの映画鑑賞眼もかなりのものだ。

### <キーワードは、旅愁、郷愁！>

2010年2月17日に亡くなった俳優・藤田まことの最大の業績は、やはり『必殺』シリーズ。個性豊かな「必殺」仲間たちのキャラは秀逸だったが、それ以上に私が印象に残っているのは、西崎みどりが歌った主題歌の『旅愁』。これは1974年つまり私が大阪弁護士会に登録した年の哀愁を誘うスローバラードのヒット曲だが、難仕事をやり遂げた必殺仲間たちの心の中をうまく表現しているようで心地良かった。

本作は「コロンブスはポルトガル人だった」ことを論証するための旅を続けていくマヌエルの姿を、100歳を超えてなお映画を撮り続けるオリヴェイラ監督の生き方にダブらせて描いていくものだが、最後に年老いた妻シルヴィアが口ずさむ「アフォンソ・ヴィエイラの詩」が印象的。その詩は「“郷愁”という言葉 この言葉紡ぎ出した人よ 初めて呟いたその時 涙を流したことでしょ」という短いものだが、まさにその中にマヌエルとその妻シルヴィアの人生がいっぱい！ラストでは、本作のキーワードである「郷愁」をタップリと味わいたい。

2010（平成22）年6月28日記